

比較文化会報

Dec. 1996 No.17

本部事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線216

発行者 芳賀 馨
編集者 楠 純 一

昭和九年の日英語対照研究

同志社大学文学部教授 石黒 昭博

——先人たちの深き足跡——

言語学の世界では、二つ以上の言語を比べるとき、単に比較するとは云わない。比較文学と云うときにも、比べる作家ないし作品に影響関係が無ければ比較研究とは云わないらしいが、言語学では、比較言語学と云うときには、比較の対象となる言語が同語族に属していること、つまり源をひとつにすることが不可欠である。英語とドイツ語、フランス語とイタリア語などの比較は立派なモデルであるし、英語とスペイン語でも成立する。東洋の言語だと、中国語とチベット語、タガログ語とハワイ語もOKである。

それでも、例えば、源を異にするのが明らかな、英語と中国語、日本語とオランダ語などの諸構造を比べる研究も存在する。言語学では、このような語族を異にする言語同志を比べる研究は、対照研究、対照言語学と云って、比較言語学とは区別している。英語では comparative linguistics、contrastive linguistics と云うように違った呼び方をする。

最近の言語学の研究目標のひとつに世界の自然言語のすべてにまたがる普遍現象の発見があるが、この language universals と呼ばれるものの発見には、今まで述べたような厳密な違いを重視しないで日本語と英語を比べることも比較研究と称して、わざわざ対照研究と云わない人たちもいる。

さて、いま私の机上には、榎田秀郎、大野義太郎共著の「比較対照日英文法綱

要」と題された書物がある。これは、昭和九年に創文社より出版されたもので、現在では稀書に属するが、恐らくわが国では出版された最初の体系的な日英語対照研究の書物であろう。ここでは対照とする語が使われているのは興味深い、内容は単なる思いつきや雑多の知識の寄せ集めではなく、きわめて分析的、体系的である。

目次を概観しても、第一章、第二章は言語学的知識の紹介、第三章より第八章は音韻論と称して、日英語の母音音、音節、アクセント、音韻変化までを比べている。第九章より第十八章は、単語論と称し、名詞、代名詞、形容詞、動詞、助動詞、副詞、助詞、接続詞、感動詞、接頭辞、接尾辞と各品詞について両語の類似性、非類似性を論じている。第十九章より第二十八章は、文章論と称し、いわゆる統語論を扱っている。

もちろん、現在の言語学の諸理論からみるもの足りない点が多いが、なかなか卓見に充ちている箇所も少くない。参考文献を見ると、日本語文法関係二十四冊、英文法関係十九冊と当時の最新の文法書が列んでいる。まだ構造主義も生成文法も生まれていない時代のものなので伝統文法書ばかりだが、例えば、英文法書ではイエルセルセンのものが四冊含まれ、内容にもこのデンマークの生んだ偉大な文法学者のものを深く読んだ跡がたどられ、大きな影響をうけている。

もうひとつ興味深いのは、日本文の諸例が適切で豊富だが、すべて文語であることで、これまたこの時代を映し出している。一例をあげれば、

Tomorrow you will find the flowers in the park in full bloom.

明日公園へ行ったら花が咲いてをらうこのように随所に対照例があげられている。この例文でも、日英語の構文の違いを助動詞の用い方に即して、主語の違い、発想法の違いにまで論を及ぼしている。

著者のまえがきにも、本書が英語を学んでいる諸学生に有用であろう、とあるが、英文法を通して国文法を理解することにも大いに役立ったことと思われる。このような対照研究が一九三〇年代に出ていたことは一驚に値する。もしわが国の英語教育が受験第一主義におちいらず、本書の教えるような方向に進んでいたら日本人の英語ももっと違ったものになっていたのだらうと思う。

もちろん、本書は言語学書というよりは、語学教育書であることを目的として書かれたと考えられるが、散見される著者の日英両語に対する洞察力の鋭さには感服せざるを得ない。ここで紹介されている卓見は、生成文法理論で云い直しても十分通用するもので、学術論文が何本も生み出される素地がのぞかれる。私も一読して、眼の鱗が落ちた想いを何回かして、立派な先輩たちに脱帽した。

第十八回大会を顧みて

中国・四国支部長 畠中康男

平成八年六月七日に役員会、懇親会、六月八日に総会、研究会が実施され、盛況であった。

役員会では庶務報告ののち、次の議題が協議された。

- (1) 『比較文化論叢』の発行について
- (2) 『比較文化研究』の編集について
- (3) 第二十回大会(弘前大学)について

- (4) 会費納入促進と会員名簿について
- (5) 「飯綱高原森のセミナー」について
- (6) 会計報告
- (7) 支部役員について

研究大会は「シンポジウム」、「講演」、研究発表からなり、活気に溢れる大会であった。

「シンポジウム」は石黒昭博司会のもと、「比較文化の領域」と題して次の五名の講師によりさまざまな分野から比較文化研究のありかたや意味について深く討議された。

虫明茂、高山有紀、芳賀文子、福田益和、山内信幸

「講演」は田中文雅就実女子大学教授「戦時下のカナダ日系人収容所の文化活動」で、戦時中の収容所での文化活動に生きる希望をつないだ記録の紹介に深い感銘を受けた。

研究発表は七分科会で三十二件の研究発表が行われ、活発な質疑応答があった。ただ限られた日程で多数の研究発表を実施するためには分科会の数を多くしなけ

ればならず、聴衆には不便で、この点の改善が望まれる。

最後に、プログラム配布など、不手際があったことをお詫びいたします。

《第十八回大会総会報告》

一 報告

庶務報告

- (1) A 『比較文化研究』発行について
29号、30号及び31号を発行。
- B 主な送付先

国立国会図書館、郵政省郵務局、HARVARD YENCHING LIBRARY、RYUKYU。

- (2) 第十九回大会について

A 開催校 同志社大学田辺校地
B シンポジウムのテーマ

- (3) 「比較文化の国際化」
第十七期日本学術会議登録事務完了について

会員候補者を出す手続がなされた。マクミラン社広告の件

- (4) 「研究」31号を最後に広告を中止。人事について
- (5) 北東北支部長に栗原靖(弘前大学)、中国・四国副支部長に進藤秀彦(就実女子大学)、学会監事に町屋昌明(八戸工業大学)就任。

二 議題

- 1 『比較文化学論叢』について
芳賀馨を編集者に、二十回大会を記念して、標記の本を発行する予定。投稿希望者は芳賀まで(電話〇二二二七四一四一四〇)
- 2 『比較文化研究』編集について

- 2 論文集掲載希望者へ

- (1) 編集委員長 芳賀馨を選出。
- (2) 投稿料 一頁当り約五千円。
- (3) 出版補助金 各担当支部へ四万円。
- (4) 背表紙印字 高低を統一する。
- (5) 英語ナンバー発行 関西支部担当。
- (6) 発行回数を年四回に。現在三回の発行を四回(クォーターリイ)にすることが提案され、継続審議に。
- (7) 投稿権 正会員だけに認める。

- 3 第二十回大会について
- A 開催校 弘前大学(予定)
- B シンポジウムのテーマ(未定)
- 4 会費納入促進と会員名簿について
一昨年度、昨年度そして今年度の三年間、渡り会費を滞納した会員は名簿から削除されることに決定。
- 5 「飯綱高原森のセミナー」を日本放送芸術学会及び日本比較文化学会の共催にする件
- 6 日本比較文化学会も参加、共催することになった。
- 7 会計報告
- 8 シンポジウムのレジユメ掲載
- 9 関東支部担当の「研究」に掲載する。

報告了承された。

「研究」31号を最後に広告を中止。人事について

北東北支部長に栗原靖(弘前大学)、中国・四国副支部長に進藤秀彦(就実女子大学)、学会監事に町屋昌明(八戸工業大学)就任。

「比較文化学論叢」について
芳賀馨を編集者に、二十回大会を記念して、標記の本を発行する予定。投稿希望者は芳賀まで(電話〇二二二七四一四一四〇)

『比較文化研究』編集について

論文集掲載希望者へ

研究会に入会を希望する方は、本部署務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお送り致します。入会申込書は本部署務局および各支部に備えてあります。

学会誌「比較文化研究」は年に三回発行しております。掲載を御希望の方は左記へお問い合わせ下さい。(五月末日メ切)

電話 〇二七三二二六一一五五 (九月末日メ切)

〒九六〇一〇二 福島市光が丘一 福島県立医科大学 外国語講座内 日本比較文化学会東北支部
電話 〇二四五二四八二二二 (十二月末日メ切)

〒六〇二 京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学文学部石黒研究室内 日本比較文化学会関西支部
電話 〇七五一二五一四〇二六

3 学会誌「比較文化学報」に近況報告、支部活動報告、研究部会報告、新刊紹介等で投稿なさる方は、左記の要領でご応募下さい。

- (1) 近況報告 縦書 十八字×七行
- (2) 新刊書、編注書等の紹介 近況報告の場合と同じ
- (3) エッセイ投稿 縦書 十八字×三十行
- (4) 支部報告、研究部会報告 縦書 十八字×六十行

投稿メ切日 毎年七月三十一日
投稿先 〒九六〇一〇二 福島市光が丘一 福島県立医科大学 数学講座 楠 純一

入会希望者へ
研究会に入会を希望する方は、本部署務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお送り致します。入会申込書は本部署務局および各支部に備えてあります。

学会誌「比較文化研究」は年に三回発行しております。掲載を御希望の方は左記へお問い合わせ下さい。(五月末日メ切)

電話 〇二七三二二六一一五五 (九月末日メ切)

第十九回大会案内

時 一九九七年六月十四日(日)

開催校 同志社大学田辺校地

問合先 〒六二〇一〇三 京都府綴喜郡

田辺町多々羅都谷一―三

同志社大学言語文化教育研究セ

ンター内

第十九回日本比較文化学会全国

大会事務局 山内信幸

電話 〇七七四一六五―七二一九

FAX 〇七七四一六五―七〇六九

自宅 〇七七四一七二―一〇九九

E-mail nyamach@mail.doshisha.ac.jp

研究発表希望者へ

- (1) レジュメをワープロなどで、B5版横書き一枚にまとめて下さい。その際、左右の余白を二センチほど残して下さい。
- (2) 一九九六年十二月三十一日(火)必着で上記山内信幸宛に書留でお送り下さい。

シンポジウム・テーマと講師の推薦

第十九回大会のシンポジウム・テーマは「比較文化の国際化」です。講師は

先着順に四人まで受け付けますので、各支部は九月末までに推薦して下さい。推薦された講師は上記研究発表(1)、(2)の要領で、レジュメをそれぞれ一通ずつ次の所へ送って下さい。

送り先 上記山内信幸宛一通(書留)

送り先 〒七〇三三 岡山市西川原一丁目

六―一

就実女子大学文学部品中研究室

品中康男宛一通(書留)

電話 〇八六一二七二―三一八五(代)

内線三四八

《会長室だより》

会長 芳賀 馨

この「会長室だより」も三回目になる。年間十数件の日本学術会議の連絡事務は例年通りであるが、大きく変わった件が一つある。今までは、学術会議事務局から直接「日本学術会議月報」が無料で送られて来たが、今回、財団法人・日本学術協力財団という組織が出来て、月刊誌「学術の動向」が発行されている。賛助会員のみに無料配布されるが、個人会員年会費が一万円である。JACCとして、私が個人会員となって配布を受けており手許に96・8月号まで持っている。で希望者は私まで御連絡を頂きたい。「会報」No.15及びNo.16で提案し、No.18大会の役員会・総会で承認された「比較文化学論纂」発行に関しては、各方面から数多くの御意見を頂き感謝している。執筆希望者が九月現在で八名になった。諸々検討を続けているが、「約十五万円」の負担を受けて頂き、その対応金額程度の部数を受け取る権利を保有するという方法については、「昨今の出版業界の事情を考えると」残念ながら変更できそうにない。総合文化論も含んだ論集にしたと考えている。現在なお会員全体には徹底していないかも知れないので、再度この欄を借りて執筆者を広く公募したいと思う。共者という形になるが、著書をもつことは、特に若い研究者には業績的に有意義であると私は経験的に考えてい

る。希望者は私に連絡して頂きたい。No.20大会(弘前大学)までには完成して、会員の希望者にも配布できるようにして学会の二十周年を記念にしたいと思う。なお、当学会は第十七期の「日本学術会議」の学術団体として承認された。

会員新刊紹介

受贈図書(一九九五年四月―一九九六年三月)

【聖泉論叢】第3号(一九九五年十一月) 聖泉短期大学学会

【日本教科教育学会誌】第18巻第2号(一九九五年九月) 第3号(一九九五年十二月) 第4号(一九九六年二月) 日本教科教育学会

《欧文による論文掲載希望者へ》

掲載希望者へ

第十八回大会の総会で、関西支部編集による「比較文化研究」は、今後欧文による原稿のみを受け付けることが決まりました。

「投稿規定」は雑誌の各号に掲載されており、編集委員から投稿者への「要望」が比較文化会報No.16の編集後記で述べられています。

このたび関西支部編集(編集責任者 石黒昭博先生)による雑誌がNo.三四から欧文論文のみになることに伴い、担当編集委員より投稿者への「要望」がありましたので要約して述べます。

(一) 書式の詳細は、それぞれの所属学会

の通知に当たって下さい。
(二) 欧文の論文が掲載されている本誌の最近号No.三一も参考にして下さい。
(三) 編集の仕事がより円滑に行えるよう投稿を予定されている方は、なるべく前もって担当編集委員の山内信幸先生(同志社大学 田辺校地 山内研究室 直通電話 〇七七四六一五―七二一九)へ連絡して下さい。

《支部からの報告》

アメリカ文化公開講演会

一九九六年三月十六日(土)、仙台市中央市民センターに於いて、日本比較文化学会と日本放送芸術学会共催による「アメリカ文化公開講演会」が開かれた。講師にロジャー・クーパー氏(テキサスキリスト大学ラジオ・テレビ・映画部助教授、大阪大学フルブライト客員教授)を迎えて、「テレビと映画のジャンルはどのように生まれたか」と題して講演が行われ、盛会であった。

関西支部活動報告

(一九九五年年度)

四・二二 Halmonの遺産: Our Mutual Friendに関する一考察 玉井 央絵

E. Hemingwayの掌編: Cat in the Rainを読む 河井 恵子

災異改元における「和」の機能 山口 美和

五・二十 言語相対論―ウォーフ説の現在― 三浦 秀松
Gray's "Elegy" and New Ex-

Perences of Japanese Readers
橋本登代子

オーストラリアの大学で……
体験雑話 太田 幹夫

Understanding of Metaphor
一 経験的基礎にもとづいて

西川 祥子
Metaphorの機能—その伝達性
と遊戯性と創造性について

渡辺 一栄
文字と音声を通じて—英作文
の授業の試み 緒方万佐代

アルバチーノのダンス
吉川 禮三

Willie CollinsのMoonstoneを
中心に— 中島 剛

An American Dream in the
Adventures of Tom Sawyer
森下 和彦

翻訳・色は匂えどPARTVII—
翻訳は「不実の美女か」—
釜池 進

相 (aspect)の観点から見た
動詞分類法 川崎 明仁

Kiplingの見た近代化日本
麻生 規子

アルバチーノのダンスPART
II 吉川 禮三

Mark Twainの「アメリカ
の夢」への愛情とHuckleberry
Fin 梅田 光恵

写真家の眼—石元素博が映し
出す人間社会 水口 香

再びオーストラリアの大学で
—体験雑話— 太田 幹雄

受動構文—情報構造の観点か

十二・九

受動構文—情報構造の観点か

三・十六

私と紙ヒコーキ

梅田 清江

ジョイス・歴史・新歴史主義
—「ユリシーズ」第10挿話を
中心に— 田村 章

言語と性—会話分析からのア
プローチ— 斎藤紀代子

アメリカ映画に現われた「日
本」のイメージ—主人公の異
文化体験から— 増田 幸子

「Post Colonial」と「場所」—
ハックルベリーフィンの冒険
から戦後日本文学へ— 森野 豊

情報の流れとその伝達手段を
めぐって 横山 仁視

話し手の主観性について—文
副詞を例に— 山路 順子

日英語におけるaccentとdo-
main 吉田 優子

Roger's versionにおける二元
論 柏原 和子

英文学のユーモア 斎藤 勇

南東北支部活動報告
(一九九五年年度)

七・十五 放送芸術学の諸問題
芳賀 馨

十・二二 安売りと値引き 六角 順

精神障害と生活保護—アル
コール依存症者に対する処遇
の問題点— 金子 元久

十一・二五 この一年を振り返って
食生活の面から 芳賀 文子

三・十六 私と紙ヒコーキ 明石 英子

森 一

随想 「食文化考」から

きやま 章一郎

アンドウルー・デュアー
太布を着る 高橋八重子

小学校のとき、日本人の主食は米（こ
飯）であり、西欧人の主食は小麦（パン）
であると教わった。しかし林望氏による
と、イギリス人の主食がパンであるとい
うのは誤りであるという。氏がイギリス
に滞在した折の体験に基づいて書かれた
エッセイ（林望著「イギリスはおいしい」
平凡社 一九九二）によると「英語には
意外にも主食と副食という概念はない」
そうである。「イギリスの食パンはどれ
も薄切りで、それを食するときにはトース
トしバターを塗る、その上にジャムや
マーメイドを一かたまりのせたりする。
このようなベタベタしたものはそのまま
では食べにくいから、パンを履（は）っ
てくるのであって、主たるものはその上
の「もの」でパンは「副」である」とい
う。私たちには主食と副食という概念が
あるため、西欧の食事をこれらと対応づ
けて、小麦が西欧人の主食であるとする
のであろう。異なる文化を受け入れると
き、その知識や技術や制度などを受け入
れることに力が注がれ、それを創り出し
た民族の価値観、思想的な伝統、言語や
生活習慣の異質性といったものが切り離
されてきたように思える。このような誤
った文化理解は、日常私たちの周辺で少
なからず起こりうることであらう。

《編集後記》

編集の仕事を進めているとき、思いつ
いて会報のバックナンバーをファイルか
ら取り出した。紙面にゆとりと落ち着き
が感じられる。いまの紙面は行間がギツ
シリ詰まった感じがする。それだけ情報
量が多くなったのかも知れない。

そこで今回は、タイトルと本文の間を
一行空けて余裕をもたせてみた。

なお今回は、会員の図書発行の部数が
僅少のため、会員新刊紹介の欄が例年に
較べて大幅に減じたため、余白が生じた。
その分を急遽随想で埋めた。筆者は、急
ぎの執筆は推敲する時間がなく駄文を書
き連ねてしまうからと一度は辞退されま
したが、御無理をお願いし原稿を頂いた。
エッセイ投稿は、会報でも呼びかけて
いるところですが、まだ一編も応募があ
りません。皆さん奮って応募して下さい。
今年も無事入校にこぎつけた。お忙し
いなか御協力下さいました先生方、有難
度うございました。（楠 純一）

